宗教新聞

発行所 宗教新聞社
東京都新宿区新宿5-13-2
〒160-0022
電話 03-3353-2940(代)
FAX 03-5363-5182
郵便振替口座 00130-9-22704
URL http://www.religion-news.net
©宗教新聞社 2024

購読料（税込）

1部	500円
半年	3,000円（〒共）
年間	6,000円（〒共）

〈社是〉

一、精神革命の旗手
一、宗教連合の具現
一、地上天国の建設

賑わう首都圏の初詣

各地ともコロナ禍以前に

神奈川県川崎市の真言宗智山派大本山金剛山金乗院平間寺（川崎大師）では、元日の午前零時からは護摩修行が行われ、今年はコロナ禍以前の水準で多くの参拝客が訪れた。参拝者らは、係員による交通整理が整然となされる中、大山門から境内に入り、献香所で煙を浴びて身体の痛いところにあて、無病息災を祈った。その後本尊である厄除け弘法大師が祀られている大本堂で参拝し、厄を払い諸願成就を祈願した。

川崎大師元日の初詣＝元旦、川崎市

四国から参拝に訪れたという女性は「もらっているお金は変わらないのに物価だけ上がったので、もっと楽になりたいと思い、家族の幸福と金運上昇を祈った」と述べ、50年近く毎年欠かさず初詣に来ているという男性は、「両親がもう歩けなくなっているので、家族を代表してお参りにきた。家族の無病息災、所願成就をいつも祈願している」と語った。また、ベトナムから来たという男性は「初めてここに来た、素晴らしい所だと思う。家族と仕事のことを祈った」と話していた。

神奈川県川崎市の稲毛神社では、元日には境内の外、道路まで列ができるほど多くの初詣の参拝者で賑わっていた。午後零時に元旦祭が執り行われ、午前2時からは稲毛神社に古くから伝わる古式勝祈祷が厳修された。午前11時には五穀豊穣、氏子・崇敬者の安寧、産業の発展、国家の平安、世界の平和を祈る歳旦祭が斎行された。また、同社では1月1日から7日まで有名人慈善絵馬展が開かれ、画家・書家・芸能人など各界で活躍する人たちの手による絵馬2000枚が境内に展示された。希望者は入札することができ、収益金は社会福祉に役立てられる。

参拝にきた若い女性は「自分は学生なので、学校で頑張れるように祈った」と語り、子供連れの夫婦は「家内安全と子供達の健康と将来のために祈った」と話していた。

初詣参拝者で混み合う伏見稲荷大社＝京都市東山区

東京都千代田区の神田神社では、午前0時には歳旦祭が行われ、皇室の弥栄、国家安泰、五穀豊穣、氏子・崇敬者の無病息災・開運招福を祈願した。コロナ禍以前は30万人以上の参拝者が訪れていた同社では、係員、警察官による誘導がなされる中、神社の外まで長い列ができるなど、多くの参拝客が訪れ、コロナ禍以前の水準に戻り、元日らしい賑わいを見せていた。

アメリカから来たという男性は「伝統を感じるとても良い場所だ。家族のことや自分の願いがかなうように祈った」と述べ、また若い男性は「独身なので世界の平和と金運上昇を祈願した」と語った。また、オーストラリアから来たという家族づれは「観光でこの場所に来たのだが、来てよかったと思っている。境内は綺麗で、清潔だ。そして人々は秩序を保ち、整然としていて、本当に素晴らしい」と話していた。

稲毛神社元日の初詣＝元旦、川崎市

埼玉県秩父市の秩父今宮神社では、甲辰歳を迎えた正月、各地から多くの初詣客が訪れていた。コロナ明けもあったが、今年は龍神様のご神徳に感謝し、世の安寧、家内安全、無病息災を祈願する人々が多かったと思われる。塩谷崇之宮司は「例年に比べたら、元旦はすごい人出でした」と語っていた。

神田神社元日の初詣＝元旦、東京・千代田区

今宮神社の初詣＝1月2日、秩父市

秩父の霊山・武甲山から湧きいずる霊泉に「水神」を祀る古社・秩父今宮神社（塩谷崇之宮司）は、役行者ゆかりの修験の場。霊泉の傍には観音菩薩の守護神が「八大龍王」に合祀されている。境内の中央には樹齢千年を越える欅の古木がそびえる。県の天然記念物に指定されたこの木は「龍神木」と呼ばれ、ここに祀られる龍神の住処として信仰を集めている。

初詣で賑わう京都の社寺

伏見稲荷、瀧尾神社へ

元旦からの3日間、京都市内の社寺は初詣の参拝者、それに海外からのインバウンド観光客で大変な賑わいだった。元旦に最大震度7の地震が石川県能登半島で発生し、また2日に羽田空港で航空機事故が発生したため、今年の正月は不安を抱えてのスタートだった。

しかし、市内の社寺では大みそかの深夜から翌元旦の閉門まで、雨交じりのうすら寒い天候だったにもかかわらず、今までに無いほどの参拝者を集めた。翌2日は一転して快晴に恵まれ、例えば東山区の伏見稲荷大社では正月三か日で250万人をこえる人々が参拝した。晴着姿の参拝者の中には多くの外国人旅行者も入っていた。

今年は辰年ということで瀧尾（たきお）神社（東山区）には、参拝者が数百メートルの列をなして並んだ。ここの拝殿の天井には、日本最大となる長さ8メートルの木彫りの龍が身をくねらせて睨みをきかせているからだ。同社の佐々貴信美宮司によると「12年に一度、辰年にはこのように大勢の方が参拝に来られます」とのこと。普段、拝殿の天井を見上げる人はほとんどいないため、「近所でもこの龍を知らない人は大勢いて、引っ越しできて12年たって初めて気付く人が多くいます」（佐々貴宮司）という。

祇園祭で引かれる山車の一つ大船鉾の船首には、巨大な龍頭が付けられるが、その龍頭を江戸時代の名彫物師・九山一門が彫っていて、ここの龍も手がけた。この巨大な龍が完成した後に、龍が天井を這うことができるような拝殿が寄進され、さらに龍を使いとする辯才天が勧請されたと言われている。つまり、一番先に龍があって、次に龍にあわせた拝殿が造られ、その後に龍を使いとする神様がやって来たというほど立派で有名な龍だ。

8メートルという長さは本当なのかと佐々貴宮司に聞くと、「ひげの先端からしっぽの先まで、私が巻き尺を使って計りました」とのこと。龍神様に対する愛は並々ならぬものようだ。参拝者は台湾、韓国、フランスなど海外からも多かったが、地元の人たちは「次にまた混み合うのは12年先の辰年。それまでは静かです」と話した。

天井の木彫りの龍を見上げる参拝者＝京都市東山区の瀧尾神社

社説

防災は地域づくりから

地震発生から1か月以上を経過した能登半島の現状は、復興への数多くの課題を私たちに投げかけている。程度の差はあれ、同じような自然環境の日本列島に暮らす私たちにとって、防災・減災は地域づくりの基本であることを改めて教えられた。

身近な人の死を悼む心情に発し、共に暮らす人々の和を保つ祭祀として発展してきた宗教は、「救い」を教えの核とすることにより、広く人々の心に受け入れられ広まってきた。社会の発展に伴い、「救い」の内容は、疾病は医療、貧困は経済、平和は政治と、それぞれの分野で進められ、宗教の担当は人々の生き方に集約されてきている。社会を形成して生きる人としての、個人、家庭、地域での在り方である。

日本的風土の地域

日本のボランティア元年とされる1995年の阪神・淡路大震災では、地域性を軽視した復興住宅での災害関連死が問題となった。その経験から、2011年の東日本大震災では、地域社会を維持しながらの復興住宅建設が目指され、東北学を提唱した民俗学者の赤坂憲雄・学習院大学教授（福島県立博物館館長、当時）は、「被災地のいたるところで宗教が露出している」と語っていた。人は個人としての尊厳を守りつつ、家庭や地域社会と共に生きているのである。

従来の欧米発想のコミュニティーは、人間だけの、しかも生きている人だけの地域社会が論じられてきたが、日本の風土には当てはまらない。柳田国男が指摘したように、日本の町は自然と一体で、さらに、そこに鎮まる先祖たちも参画したコミュニティーこそが、ふるさとととしての地域社会である。そこに郷土愛が生まれ、アイデンティティーも形成され、住民の絆が強まる。そうした文化的でスピリチュアルなコミュニティーが人々の生きる力となる。実際、祭りや郷土芸能、先祖供養、自然への鎮魂を通して、広い意味でのいのちとの交流をもったコミュニティーづくりが被災地の復興に効果的だった。

気候変動の影響からか、近年は「災害は忘れたころにやってくる」のではなく、「忘れないうちにやってくる」ようになった。そこで、災害に強い地域づくりが課題になっている。防災には「自助・共助・公助」と言われるが、能登ほどの災害に見舞われると、当初、公助はほぼ期待できない。当面は、自助・共助によって生き延び、心が折れないようにするしかないのである。

地域防災計画作りで重要なのが高齢者など災害弱者への対策である。それぞれに応じた支援者や避難先、避難路の確保が福祉委員などによって進められているが、個人のプライバシーを守りながら、日常的な接触、交流の大切さが再認識されている。要は近所づきあいで、日頃から事情をよく知っているから災害時の支援もしやすい。

淡路市にある北淡震災記念公園の野島断層保存館での被災者の話によると、当時は近所の人が家のどの部屋で寝ているか知っていたので助けやすかったが、その後、個人主義化や少子高齢化が進み、それができなくなっているということだった。これは全国どこでも同じだろう。そこに宗教の役割が期待される。

仏教史を見ても分かるように、宗教の教えは最終的に利他的な世俗倫理に帰着するようになる。利他が自利につながるという論理は後付けで、人は利他的に生きる、自利的には生きられないようになっているというのが宗教的人間観であろう。心より体が先に利他的に振舞うようになっているのであり、それゆえ大きな社会を形成できたのである。

ところが行政は自利的な個人を想定して制度設計されているので、民間が補わないと利他的な社会は実現されない。予算や規則に縛られる行政は、民間の力を借りないと地域社会を守れないのが現状なのである。

地域は救いの場

二度にわたる豪雨災害を受けた広島市である学区の自主防災連合会を立ち上げた元消防士は、若者や子供たちが防災活動の先頭に立つことで、大人たちも参加するようになったという。いつの時代でも、好奇心旺盛な人たちが社会の先端を切り開くのである。小学校での防災教育がその始まりで、学区ごとの方がまとまりがよい。

考えてみると、周りの人たちや自然環境も自分の一部という感性は、子供たちにとって当然のことだろう。だから、体も自然と利他的に動く。それが大人になるに従い、考えてからでないと利他的には動けなくなる。イエスの言う「幼子のように」というのは、そういうことかもしれない。そうであれば、地域づくりは自分づくりであり、そこにおいて利他と自利は一つになっている。道元の悟り「仏性があるから修行できる」を一般化すると、「利他の修行ができるのが救い」となろう。そうした修行の場が地域なのである。

灯

「わたしは神に対して生きるために、律法に対しては律法によって死んだのです。わたしは、キリストと共に十字架につけられています。生きているのは、もはやわたしではありません。キリストがわたしの内に生きておられるのです。

わたしが今、肉において生きているのは、わたしを愛し、わたしのために身を献げられた神の子に対する信仰によるものです。」（ガラテヤの信徒への手紙2：19―20）

復活したイエス・キリストによって回心に至ったパウロは、後半生をキリストと共に生きる人生に徹した。信仰のゆえに捕らえられ獄に繋がれ、死ぬにしてもキリストのようにその身を捧げていった。それがキリスト教徒の模範ともなっていく。

今からおよそ430年前の日本でも26人のキリスト教宣教師・信徒が京都から長崎に曳き行かれ、西坂の丘で尊い生命を捧げた。そのひとりパウロ三木はキリストのごとく、十字架上でこう叫んだ。「私は国王とこの私の死刑に関わったすべての人々を許す。」1597年2月5日が殉教の日にあたる。（I）

天地

NHKの大河ドラマ「光る君へ」では、当時の陰陽師の活動や怨霊信仰も描かれている。人間の知的営みの成果と言える科学は物事の因果関係を解くもので、その意味で陰陽道は当時の先端科学だった。病気の原因を悪霊とするのも同じで、五節の舞の途中で気を失った紫式部のために、僧と祈祷師が呼ばれていた。もっとも理性的な紫式部はそんなもの信じていない▼紫式部が一番影響を受けたとされる『蜻蛉日記』の作者・藤原道綱母が2月4日の放映に登場した。権力の頂点を目指す藤原兼家の妻の一人で、知的でプライドが高いため、兼家の浮気が許せず、揺れ動く心の内を日記に綴ったものが、後に日記文学の最高峰ともされるようになった。内心の率直な吐露が、文学にまで進歩したのである▼通い婚が一般的で権力欲旺盛な藤原兼家にとって複数の妻を持つのは当然で、当時は社会的にも非難されなかった▼『源氏物語』は光源氏の恋のアバンチュールを描いた物語と思われがちだが、最後の「宇治十帖」まで読むと、人生の長い物語がテーマなのに気づく。そんな生き方をしていると、こうなりますよ、という▼二人の貴公子から思いを寄せられたヒロイン浮舟は宇治川に身を投げるが、比叡山の僧に救われ、懇願して出家する。ところが貴公子から話を聞いた僧は、早まったと思い、浮舟に還俗を勧める。その僧のモデルは源信とされ、当時の浄土信仰にも紫式部は懐疑的だったことがうかがえる。宗教史的にも面白いドラマである。

本紙定期購読のお申し込みは
■ご希望購読期間 ■氏名 ■郵便番号 ■住所
■連絡先電話番号 ■メールアドレス（お持ちの場合）を明記の上、宗教新聞社宛、はがき、FAXまたはEメールで左記へお申し込みください。
宗教新聞社
〒一六〇―〇〇二二
東京都新宿区新宿5―13―2 4F
電話03（3353）2940
FAX03（5363）5182
e-mail:religion@sage.ocn.ne.jp
http://www.religion-news.net
※購読料 年間6000円（税・郵送料を含む）

仏教の危機人生の危機に希望の矢を放つ…三部作
浄土真宗の智慧 釈尊から親鸞に学ぼう 定価1200円＋税
寺院経営がピンチ！ 坊さんの覚悟 定価1200円＋税
死に方の流儀 中村メイコさんと山折哲雄先生に訊く 定価1200円＋税
瑞田信弘（たまだ・のぶひろ）・著 浄土真宗本願寺派称讃寺住職
発行：アートヴィレッジ
〒663-8002 西宮市一里山町 5-8-502
TEL 050-3699-4954 FAX 050-3737-4954
URL：https://artvillage.thebase.in/

山喜房佛書林
神野富一著 A五判 五八〇頁 本体一六、〇〇〇円
補陀洛信仰の研究
チベット・アジア各地の補陀洛信仰とその伝播ルート等の集大成
福田亮成編 B六判 二九〇頁 本体五、八〇〇円
弘法大師聖句集成
本書は大師の言葉が読者の心に直接届くよう工夫され、掲示伝道や寺報の種子に最適。
〒113-0033 東京都文京区本郷5-28-5
TEL：03-3811-5361 FAX：03-3815-5554

新刊！
人生の苦しみに積極的な意味はあるのか？
『21世紀に生きる日本人のための浄土思想』の出版を記念して、平成26年3月から28年11月までの5回にわたる講演をまとめた著者渾身の生命の書。
私の生命（いのち）の復活
上橋 泉 著
四六判296頁（本体1500円＋税）
日本人の宗教性（霊性）は回復するか？
株式会社 如月出版 販売部
〒152-0023 東京都目黒区八雲2-24-15 ラ リュミエール1F
TEL 03-6657-9000 Fax 03-6657-8999
http://www.kisaragibook.com

自由社ブックレット2
理想の政教分離規定と憲法改正
四六判87頁／本体価格500円
杉原 誠四郎 著
憲法改正を見据えたとき、宗教に関する条項、規定は、真剣に考えねばならない問題である。
自由社
〒112-0005 東京都文京区水道2-6-3
Tel03-5981-9170 Fax03-5981-9171
http://www.jiyuusha.jp/

『先代旧事本紀』の神髄を極めた著者が語る。足で調べた大和建国の謎。
（定価：本体2000円＋税）
日本国始め 饒速日大神の東遷
大野七三 著
須佐之男尊の出雲国創建後、饒速日尊が32従者と25軍団を従え、九州から大和に東遷して纒向の地に大和国を建国。その時、饒速日尊が配下を募り配置した今も残るその出自と足跡を立証する。
批評社
〒113-0033 東京都文京区本郷1-28-36 鳳明ビル102A
TEL 03-3813-6344 Fax 03-3813-8990

読みやすく、理解しやすく、真髄を極める達意の新訳
クルアーン やさしい和訳
監訳著・水谷 周 訳補完・杉本恭一郎
2019年7月第3版発行 資料増補、大改訂 定価2700円＋税
国書刊行会
〒174-0056 東京都板橋区志村1-13-15
TEL：03-5970-7421

日本よ、蘇れ
日本神話の知恵
出雲井晶 著
●定価1000円（税込み）
●四六並製 232ページ
●発行・産経新聞社／発売・扶桑社
お問合せ先／扶桑社 販売企画部
〒105-8070 東京都港区海岸1-15-1
TEL03-5403-8859
購入申込み FAX:03-3578-3075

縄文のパワーフィールドへ
神道よ！今こそ《古来の本物の道》に戻るのだ！
奈良泰秀
エハン・デラヴィ 著
本物のシャーマニズムを日本人が忘れている。神道の潜在力を思い出し、世界に伝えていこう。ケルト民族末裔の意識研究家が、神道のエッセンスを聞き出す。チャネラー、ヒーラー、コンタクティを超える、宇宙と直接つながる知恵は、ここ日本の神道にあり！
四六上製1785円（税込）
株式会社ヒカルランド
〒162-0821 東京都新宿区津久戸町3-11
電話：03-6265-0852 FAX：03-6265-0853
http://www.hikaruland.co.jp